

幼小における市民性を育成する教育環境

— フィンランド、オランダ研修視察からの示唆 —

猶原 和子

要 旨

新たな教育改革のうねりが高まる中、名古屋市や広島県ではベーターゼンのイエナプランを参考にした教育を取り入れようとする動きが起きている。今回はセレスタン・フレネのフレネ教育やベーターゼンのイエナプラン教育がフィンランドとオランダでどのように息づいているのか、その二つの考えに基づいた実践と研究について視察と協議を行った。子ども自らが学びを計画し、他者や自然と関わりあって学びあう営みのなかで、異質性を尊重し、市民としての資質を育む手がかりを得た。21世紀スキルにつながる今後の幼小の教育課程改善の方向の一つとして提案する。

キーワード：市民性の育成、学習の個別化と協同化、社会情動的スキル、インクルーシブ教育

1 はじめに

国際団体の「ATC21s」によって提唱された21世紀型スキルは、21世紀以降のグローバル社会を生き抜くために必要な能力として各国の教育改革に取り入れられている。そこに影響を及ぼすのが、OECDも注目する社会情動的スキルであり、これは将来にわたる幸福感や健康、世帯形成や賃金に対し、認知的スキルと同等あるいはそれ以上に影響力を及ぼすと言われている。この社会情動的スキルを伸ばし、市民として育つ教育として、セレスタン・フレネのフレネ教育やベーター・ベーターゼンのイエナプラン教育が今再び注目されている。

そこで、今回はフィンランドとオランダで具体的にどのような教育実践が行われているのかを視察し、そこに関わる教師や研究者と協議し、そこから学んだことから日本の幼小における教育への示唆を引き出したいと考えた。

紙面の都合上、フレネとイエナプランに関わる部分と教育環境について取り上げ、考察する。

研修日程と概要は次頁の通りである。

なお、ここで、フィンランドとオランダの教育制度について簡単に述べておく。

フィンランドは7歳から9年間義務教育で基礎学校、その後高校か職業学校、さらに大学、職業大学校がある。初等教育から高等教育まで憲法により公立・私立を問わず無償である。また、「プレスクール（就学前教育）」も義務教育に含まれている。1994年から教員の資格として修士号を求められたため、現在は教員への希望が高く人気の職業となっている。

オランダは学校全体の4分の3以上が私立である。200人の子どもを集めれば、自分たちで学校を設立でき、宗教などの理念や、教育方法も自由である。公立も私立も国の援助は同等で5歳から16歳までの義務教育は無料であり、保護者と子どもは、自分の行きたい学校を自由に選ぶことができる。多くの子は4歳になった誕生日の日から学校へ行く。卒業後は職業的中等教育（VMBO）、高等一般教育（HAVO）、大学準備中等教育（VWO）などに分かれる。

この制度を踏まえた上で述べていくこととする。

表1 欧州視察 2017 研修日程

月 日	場所 学校名など	研修の概要
9月7日	成田発 ヘルシンキ 着	ヘルシンキ泊
9月8日	Pähkinärinteen koulu (Mantelikuja 4, 01710 Vantaa) Puistolannraitin ala-aste (Puistolann raitti 18, 00760 Helsinki)	ヴァンター市の公立小学校で授業参観と昼食。5年生の授業は一部参加（日本について、各自紹介）。 午後はヘルシンキの公立小学校を参観。フレネ教育を取り入れている校長と、フィンランドのフレネ学校に勤務経験があり、現在1年の担任をしている先生方と、フィンランドの教育について話し合う。 ヘルシンキ 泊
9月9日	ヘルシンキ市内	市内の図書館で、子どもや大人に図書館がどのように活用されているのかを見学。また、音楽ホールで地域の人々に公開しているコンサートを鑑賞する。 ヘルシンキ 泊ヘルシンキ 泊
9月10日	ヘルシンキ発 デンハーグ着	ヘルシンキからアムステルダム、スキポールへ移動後、電車でデン・ハーグへ。ピネンホフヤマリッツハウス美術館を見学。 デン・ハーグ 泊
9月11日	Hotel Mozaic, Laan Copes van Cattenburch 38-40, 2585 GB Den Haag 講師 リヒテルズ直子 Freek Velthausz, Jimke Nicolai,	午前、オランダの教育の制度と動向・視察先について、リヒテルズ直子氏の講演。 午後は、フレネ教育の専門家とイエナプラン教育の専門家によるプレゼンテーションを聴き、フレネ教育とイエナプラン教育のオランダにおける発達の背景と動向を学ぶ。 デン・ハーグ泊
9月12日	Parkschool http://www.parkschooldelft.nl/home Stanislas College www.stanislascollege.nl Freinet School in Delft http://www.freinetschooldelft.nl/de_school_	午前はフレネ教育の新設校であるパークスクールを参観。フレネ教育についてオランダの動向を知る。 昼食は、職業進学系の中等学校で個別のニーズに合わせた教育の実際と課題を探る。昼食の提供も授業の一環である。 午後は、公立オールタナティブスクールとして伝統あるデルフトのフレネ小学校を見学するとともに、その成立とその後の動向を聴く。 デン・ハーグ泊
9月13日	RKBS Regenboog www.rkderegenboog.nl 教育博物館 (Museum) www.museum.nl	午前は移民集住地区にあるカトリック立小学校 Regenboog を視察。移民・難民などオランダ語ができず社会・経済的に遅れた環境の子どもに対する教育権の保護の実態を見学し、公教育の役割を考える。 午後はハーグにある小中学生向け博物館を見学。 デン・ハーグ泊
9月14日	O3/DAK http://www.o3-ivierenbuurt.nl www.dakkindercentra.nl イエナプラン教育ワークショップ 講師 Rien van den Heuvel	午前は、ハーグ市都心部にあるコミュニティセンターとしてのワイドスクールとここで連携して学童保育と、就学前保育を行っている DAK グループの保育園を訪問。 午後はドクター・スハエプマン小学校の校長による体験的ワークショップを受ける。 デン・ハーグ泊

9月15日	Dr.Schapmanschool Marijkesingel 30, Barendrecht www.schaepmanschool. nl	オランダ・イエナプラン教育協会および教育監督局 から優秀校に選ばれたイエナプランスクールを全 日見学。朝から放課後までの流れを見学するとともに、金曜日の週末ミニ発表会（催し）も 参観する。 その後、アムステルダムへ移動 アムステルダム泊
9月16日	アムステルダム市内 美術館、ホール見学	市内のコンサート・ヘボウを始め、ホールや美術館などを見学。 アムステルダム泊
9月17日	アムステルダム発 成田着	帰国後解散

2 フィンランドの教育視察

2-1 パハキナリンネ小学校

(Pähkinärinne School)

最初に訪問したのは、ヴァンター市立のパハキナリンネ小学校である。ここは、ヘルシンキ郊外の住宅街で緑も豊かなところで、庭にある「パハキナ」（はしばみ）の木から学校名がつけられたという中規模校である。

6月までこの小学校に勤務していた Tarja⁽¹⁾ の案内で学校の中を視察し、新しい教育制度や子どもたちの実態を考慮した学習環境について協議した。

【宗教の時間】

この日の朝は宗教の集会であった。筆者たちは、体育館で行われている「フィンランド福音ルーター派教会」の朝会を見学した。近くの教会から担当者がきて講和をした後、みんなで歌うという15分程度のものであったが、教師も子どももあまり重きを置いていないように見えた。

Tarjaによると、この時間は正教会やイスラム教など、それぞれの宗教に分かれて教室で集会を行い、無宗教の人はその時間は来なくてよいことになっている。その選択は保護者が入学時に行うとのことであった。それを知らずに体育館を見学したので、集まった子ども全員が金髪で白い肌であったことに驚いた。

続く1時間目は、5年のクラスで、筆者たちが

「日本の各地の特色」を紹介することに急遽なった。金沢、日光など各地を紹介したが、担任のジョアンナは、前の電子黒板に次々と地域やこちらの伝えた内容に関するものを映し出していた。



写真1 「日本の伝統について」 5年の宗教の授業

学校全体を参観した後、昼食も一緒にいただいた。ビュッフェスタイルで学年によって時間を変えて食事をとっていた。「アレルギー用」と書かれている食品もある。子ども自身が自覚して選択することが求められる。担任はいつも神経を使っているという Tarja は話した。

【課題を抱えた子の学習環境】

昼食後は低学年1、2年生を対象にした特別支援の授業を参観した。1年担任のローラが、特別支援の子どもを集めてパソコンで好きな絵を描いて発表しようという授業を行っていた。目を引いたのはその環境である。他の教室にもあったが、椅子に

は写真2のように車輪がついていて、静かに自由に教室内を移動できるようになっている。後ろには、写真3のように、自分の世界を保障できるように仕切り版やヘッドフォンが用意されている。また、写真4のように空気が入ったぶよぶよで凹凸のある椅子に腰かけている子がおり、その子たちの椅子には車輪がなかった。「クッションが常に動くことで、立ち歩かないで落ち着くことができる」との説明であった。クッションやヘッドフォンは、後述するオランダの学校でも当たり前設置されていたのが印象深い。

【新しい教育課程に向けて】

ローラは、写真5にあるように、保護者に理解してもらうために「新しい学習過程がみえるおうち」を示して説明しているのだという。

写真6にあるような新しい教育課程では「人として市民としての成長」が中心に置かれ、「思考と学びを学ぶ」「文化の相互作用および表現」「マルチリテラシー」「ICT」「キャリア教育」など、

7つの項目がある。これはOECDの提示したものに近く、職員室にも教室にも掲示されていた。

日本で「教科がなくなった」と思われる節もあるが、そうではなく、横断的な学習が行われている。「母語の保障」もうたっているもので、それぞれの言語に分かれて学ぶ時間もあり、時間割を組むのが大変だそうである。また、休憩中も保護者とのメールのやり取りなどでとても忙しく「教師を辞めて、やっとお茶をゆっくり飲めるようになったし、食事を作ろうという気持ちになった」という Tarja の言葉が心に残った。

教室環境は、明るい色彩のものが多く用いられており、ソファなど子どもたちが好きな場所で心地よく学習できるような環境が工夫されていた。

2-2 プイストランレイッチ小学校

(Puistolanraitti School)

ここは、ヘルシンキ郊外の中規模な公立小学校で、幼稚園と隣接している。校長の Paive はスト



写真2 教室の椅子

多くの子の椅子には車輪がついていて静かに移動できる。以前オランダで教師が座っているのをみたが、ここでは子どもの椅子が動く。



写真3 自分の空間

教室後ろには、右のように、自分の世界を保障できる仕切りとヘッドフォンのコーナーが2つあった。



写真4 動くクッション

座ってられない子に対し、幾つかの厚みの違うクッションが置かれていた。自分たちで取り換える姿もみられた。

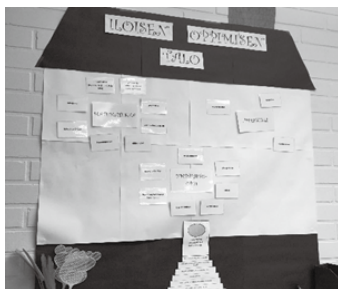


写真5 「学びの家」

学びの過程を6年間で分かるように示した家



写真6 新学習指導要領のポイント

ロンペリにあるフレネ学校の副校長だった女性で、同じフレネ学校に勤めていた4名の教師を呼び寄せて学校改革に取り組んでいる。

学校参観後、4名の教師と Paive、Tarja にフレネ教育との関連を中心に話を聴く機会を設けた。

フィンランドの小学校教師は、医学部と同じくらいの難関を突破したエリートで大学院出身であり、自分の仕事を誇りに思っている人が多い。今回の4人の教師も(幼・特支)(小・数学)のように異なる免許を2つずつ持っている。ともにフレネ学校で教える中で教育の面白さを学び、この学校へ来たのだという。以下に話題をまとめた。

【フレネ教育と一般的な教育の違い】

- ・多くの公立は先生が教え、子どもが聞いている。フレネ学校は活動して学ぶ。
- ・時間の作り方。一般校は教科単位。フレネ校はもっと全体をみて、4つのピリオドで今何が必要かを考えていた。
- ・フレネの教師は協同的。自分の強い分野を協力して教えたし、異年齢クラスだった。
- ・フレネは保護者との連携も強い。保護者と一緒の「夕方の時間」があり、保護者の得意分野を積極的に生かし、取り入れていた。(社会に広げる)
- ・フレネ学校では、クラスを半分入れ替えるなどいろいろなことが試せた。しかし、一般の先生は固くて変わることを拒む傾向が強い

【フィンランドにおけるフレネ教育】

1970年代までは大学にフレネ教育の講座があったので、Tarja や Paive は学ぶことができたが、現在は学ぶ科目が多くて開講されていない。たとえ考え方を知っていても、それがフレネだとは知らない人も多い。

フレネ教育の協会はフィンランドにあるが、アクティブではなく、ネット環境を生かして教師が個々に学び合っている。

【公立の一般的な小学校の状況】

- ・教室を自由に動くことすら嫌がる教師がいる。
- ・教科書、ワーク、テストしかなかった。(80年代に学んだ経験)。静かに座って課題をこなす



写真7 先生方との会談

が普通。見たことのないジャンプの絵を描かされて嫌だった。

- ・指導法について、公立では同僚と話しにくい。
- ・特に北の方は伝統的なところがある。

【校長 Paive の期待】

新しいカリキュラムは真ん中に「市民」でまさにフレネの考えと同じ。上から下ではなく、先生たちからの声が大切。大きなビジョンを持ちすぎず、小さな体験を積み重ねたい。低学年にフレネの先生を配属したことで、子どもたちの様子から「あ、楽しそう」と興味を持つ子どもと大人が増えて学校が変わっていくのを期待している。

先生方の熱い思いが伝わり、今後の教育への新たな可能性を感じた。その一方で、Tarja は新教育課程に対し、「もともと自由裁量権が教師にあり、やりたいことはできていたので、揃って同じ方向へという動きでいいのか？」と一抹の不安を持っている。

フィンランドは、学校で靴を脱ぎ靴下で生活するし、性格も日本人と似ているといわれる。カーテンのマルメッコを始め、自国産で明るい色彩の環境の設定は冬の長い自然とも関係しているのかもしれない。もっと彼らの歴史と文化、経済と共に教育を見つめ直すことが大切だと感じた。

3 オランダでの教育視察

3-1 フレネ教育とイエナプラン教育

ここでは、長年、オランダのフレネ教育に関

わってきた Jimke とイエナプラン教育に関わってきた Freek のレクチャーを基にまとめてみたい。

【オランダにおけるフレネ教育の現在】

フレネ教育は正式には 1948 年にアムステルダムに伝えられ、1950 年に協会が設立。その中の一人がデルフトに伝え、1975 年に一旦分裂した後、1998 年に再統合。2009 年からはベルギーの仲間（フランドル地方）と一緒に活動しており、2016 年にフレネ教育協会が統一して作られた。現在、オランダのフレネ学校は 7 校しかないが、ベルギーのフランドル地方は 70 校で 100 校に近づこうという勢いがある。ただしフランス語圏の 10 校とは関わりがないそうである。

協会組織は、50 の学校と 175 名がメンバーになっていて理事会があり、本の発行やパンフレット作成、運営などのワークグループに分かれ活動しており、年に 4 回ニュースレターも発行されている。

フレネ学校と呼ぶにはフレネ教育の特徴を 75% 以上持つ教育を行うことが求められる。子どもの経験や体験から出発し、エビデンスを持ちながら探究的に学ぶ、生きた生活学校だと Jimke は述べた。さらにフレネ教育の特徴として以下を挙げた。

仕事の計画表 : 自分の学びの計画、方針 自由作文 自由テキスト 学校間通信 : ウェブ活用 学校と学校 クラスとクラス 朝のサークル 壁新聞
--

彼は特に、美しい仕事をするのが重要だと強調した。自由作文を核として、活字などをきれいに表現し、できた語彙を壁や黒板に貼ったり、印刷したり、書き方を直して発表したりという一連の活動を大切にしているのはフランスのフレネ学校と同じである。ただ、朝のサークルについて、サークルという形式はイエナプランから来ていてオランダ独自だろうと語った。

フレネ自身の本や研究物、またフレネ教育に基



写真 8 フレネに関わる書物の一部

づいた実践や研究が数多く出版されており、その中にはフレネ著の童話「孤児のトニー」「ミネ(猫)」もあり、自然を守ることや独立の重要性を伝えているという。

さらに、右のクラスボックスには、緑(褒める)、青(提案)、黄(質問)の紙を入れ、皆で話し合う。左の鍵付きの箱には自分たちの管理運営するお金が入っている。このようなフレネにおける自主管理の形が、お金の使い方を考える模範例として、よく新聞に取り上げられるそうである。



写真 9 クラスボックス

【イエナプランスクールから MJ スクールへ】

さて、オランダのイエナプラン教育は、もともと 1923 年にドイツのイエナ大学の実験校でペーターゼンが始めた活動で、オランダ人のスース・フロイデンタールが 1955 年にオランダに持ち込み、独自に発展していったものである。イエナプランの詳細については、リヒテルズ直子の書物などが数多く出版されているので参照されたい。

フレネ学校もイエナプラン校もオランダのオルタナティブ教育共同組織に所属しており、オランダの法令でオルタナティブの良い部分が評価されているため、それぞれのよさが混じりあっているようにも筆者には思える。

また、フレネは 12 歳年上のペーターゼンに学校を参観したいという手紙も出していて、1933 年の雑誌『プロレタリア』に「イエナプランとは何か」という記事を投稿している。ドイツの大学

実験校とフランスの貧しい田舎の学校という異なる環境の中で、子どもから出発したとても近い実践がなされていたことは興味深い。

さらに、最近オランダでは、フレネとイエナプランを合わせた MJ スクール（フレネ教育は現代学校教育運動と呼ばれるので Modere とイエナプランの Jena を合わせた）も 12 校誕生している。

Freek はこの学校の特性について、次のように述べた。

- ペーターゼンは思想家、フレネは実践的な教育者であり、その二人の考えを生かす。
- 21 世紀スキルといわれるものを意識する。
- 実際に生きた経験を教育の最初におく。外の世界に子どもを連れていく、或いは生きた生活を教室に持ち込む。
- フレネ学校もイエナプラン校も行ってきたように、子どもが自分自身で学びの計画を立てる。
- 抽象的な話でなく、「子どもにとって意味のあるもの」を学ぶ。教師が読むための作文でなく、学校間通信など、子どもにとって意味を持つ活動。
- お互いから学びあう。「学びは終わりのないものだ」ということを学ぶ。

オランダでも、いまだに出来る子をpushさえ、出来ない子をせきたて、皆を同じようなレールに乗せようとする学校が多いそうである。

今後は MJ スクールだけでなく、イエナ教育者とフレネ教育者が同じ研修日をとって、一緒に学びあったり、研修を行った人に資格を与えたりするという構想もあるという。

大学でともに学んだ Jimke と Freek は息もぴったりで、一緒に書物もたくさん書いている。彼らが若手の教師に向かって、今後何を発信し、どのような影響を与えていくのか、これからも期待してみていきたいと感じた。

3-2 デルフトのフレネ学校視察

【移民の子も多く通うパークスクールの工夫】

(Park School)

この学校は新興住宅地の中にあり、2014 年に設立された新しい公立校で、同じ建物に別の学校も存在するワイドスクールである。案内して下さった Nicole によると、前述の Jimke の指導も定期的に受けているという。

イスラムの家庭やシリア難民が多いということで、オランダ語がわからない子どもたちのためのクラスもあり、タブレットや PC が積極的に活用されていた。心理的に厳しい状況にある子どももいるそうだが、建物は明るい色調で自然光を取り入れ、木製のベンチやソファなどがあちこちにあり、リラックスして学べる環境が工夫されていた。

廊下には一人ひとりの自由作文が掲示されてお



写真 10 自由に学べる廊下の机とベンチ

	Facult	Spellingwerk	Engels
1ste periode	Taalkunst 1 verspreid dieren	Taalkunst verspreid spelling	grammatica Alles woorden.nl
2de periode	Staat Staat Staat	Staat Staat Staat	Staat computer
3de periode	Lustfulle Tweelijken	Tweelijken	
4de periode	Elke lezen Alles lees	Elke lezen Engelwied lezen	Nieuwshierop computer Alles lees Houdtwerk computer
5de periode	Thema cra	Thema w is opwach	Orderzoek Iscop
6de periode	akademisch rekenen	blind typen	
Change			

写真 11 計画表（活動内容ごと）

り、計画表は曜日ごとでなく活動別のものであった。また、以前別のイエンプラン校でもみた「ストーリーバッグ」がいくつも用意されており、保護者が借りられるようになっていて写真で内容がわかるようにする工夫もされていた。



写真 12 自由作文

幼児クラスでは「靴屋」を選んだ子たちが、教室の隅に自分たちの足をかたどった看板を掲げ、長靴や家から持ち込んだらしきサンダルやヒールなどを並べていた。教室には黙々とデッサンに取り組む子もいれば、二人でレゴに向かう子、誰にも言われないが教室の砂場の片づけを一人で行い始めた子など、各自が自分の行動を自覚し、自らの意思で取り組んでいる様子がみられた。



写真 13 自ら選んで活動を進める

発達に課題を抱えた子や、戦火の辛い経験を持つ多様な子どもたちが、安心して自分で学んでい

こうとする姿とともに、保護者の成長も促す細やかな心配りがなされていることに感銘を受けた。傍には幼児クラスの遊び場や野菜を育てる農園もあり、自然の中での学びを大切にしたフレネの考えがそこにも感じられた。今後どのように展開されるのか、再び訪れてみたい。

【創造性を伸ばすフレネスクールデルフト】

(Freinet School Delft)

デルフトに古くからあったフレネスクールが統合されたもので、「Margriet (1～3年)」「Hugo de Groot (1～5年)」「Libel (5～8年)」の3つの建物がある。中心地に近いこの学校の保護者はデルフト工科大学に勤める研究者など、比較的裕福で高学歴な層が多く、入学動機も「子どもの創造性を伸ばすから」「これからの時代に必要とされる能力が育つ」からだという。

Libel だけを参観したが、子どもたちが伸び伸びと活動しているのが印象的であった。各教室の名前はデルフト焼きで描かれ、子どもの巧緻性や思考を伸ばす、カプラやレゴを始め様々な道具がふんだんにある。子どもたちは自由に発想し、考えて様々なものを創りだしていて、その作業が丁寧だと感じた。

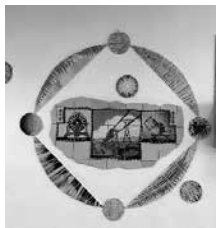


写真 14 デルフト焼きのクラス名 幼児クラスの作品

どの教室にも制作過程の作品があちこちに置かれ、そこで続きが行えるようになっている。教室に様々なコーナーがあり、そこにはソファやベ

ンチが個性的に配置されていた。

低学年担当の Malika とともに外の砂場の片づけをした子どもたちが、最後に私たちに「さよなら」のわらべうたを歌った。教師と子どもの自然な息遣いと歌声が心地よく耳に残った。

3-3 困難な地域だからこそ多様な人が集う学校 (RKBS Regenboog)

ここはハーグ中央駅からトラムで15分のところにある、経済環境の貧しい移民が集まった地域で、一時期は荒廃して危険な状態だったという。市が荒れた地域だからこそ、近隣の建物を修理し美しい街並みにしたそうで、カトリック立のこの学校の一階には一般の人々も集えるカフェや様々な催しができる空間を併せ持つ建物であった。広々としたロビーでは親子連れが読書をして



写真15 Rebenboog の環境

おり、多目的スペースでは子どもたちが柔道を学んでいた。光が差し込む集会場所では、演劇やコンサートも行われるという。さらに屋上には温室や人工芝とベンチが置かれ、長めのいい部屋は先生たちの休憩や会議が行なわれる空間となっていた。

廊下では算数のできる子たちが集まって勉強し、その先のソファで幼い子たちがレゴで遊び、課題を抱えた子がガラス張りの部屋で学ぶ。オランダ語が初めての子どもの異年齢クラスは大入り満員で扉には様々な言語が書かれていて、どの子も入りやすい配慮がされていた。混沌とした中で異なる文化を背景にした子どもたちの活気が感じられ、先生方の並々ならぬ意欲と努力を感じた。

苦しい地域ほど、環境を整え心地よく生活できる保障をすべきという市の考えが伝わり、街はか

なり落ち着き人気もでてきていると聞いた。教育を取り巻く地域環境の重要性を改めて感じた。

3-4 最優秀校に選ばれたイエナプラン校の変化 (Dr. Schapmanschool)

スハエプマン小学校はバレンデヒトにあるオランダ・イエナプラン教育協会および教育監督局から優秀校に選ばれた学校であり、校長のリーンは日本でも講演を行っている。筆者は今回3度目の訪問であったが、これまでと異なる印象を受けた。

2012年に訪問した時、階段前は明るい色調で飾られていて、どの教室にも木々が置かれ、空間をうまく使い、窓にも個性的なペイントがなされていた。

今回は階段に九九や分数が貼られており、教室もすっきりとしていた。



写真16 左は2012年の階段近く、右は2017年、九九が貼られた階段



写真17 計画表(曜日ごと)

希望者が多くて教室が不足しているというし、これまでは3月の参観で、今回は9月だからなのかもしれないが、今までのような、ユーモアや遊び心は減っているように思えた。

もちろん、学習を自覚し静かに学ぶという営みは継続されており、ipadも含め様々な学習材が活用されていた。ただ10年前に「教室はリビングルーム」という個性あふれる環境に衝撃を受けたときは異なる。今回の変化が新しい教育課程とどのように関わっているのかを知りたいと思った。

4 考察

4-1 望ましい環境づくりに向けて


①インクルーシブな教室

フィンランドとオランダでともに感じたのは、どの子も心地よく学ぶための配慮が至る所になされていることである。ヘッドフォンや仕切り、椅子の上に置く動くクッションは、ある発達課題を抱えた子たちには有効である。それが差別化でなく、必要に応じて自らを選んで用い、他の子どもたちも当たり前のように受けとめて学んでいることが素晴らしいと感じた。これは、課題を抱えた子のみならず、すべての子どもが安心して学び合うことの重要さへの気づきとなるし、市民性育成につながるのではないだろうか。

また、子どもたちはソファやベンチ、廊下の隅など学ぶ場所を個々に選択して、静かに落ち着いて学んでいた。これは、学習課題や方法を一斉とするのではなく、個別の道筋で一人ひとりが主体的に学んでいくことを保障しているからである。

日本では、残念ながらトイレも毎日並んで全員で行かせている園をいくつか見かけて驚いたことがある。イエナプランの学校では黙って札を返して自分で行っている。己の身体を知り、自分で判断して行動するという積み重ねを幼いころから積み重ねることの大切さを改めて考えたい。

②教師がくつろぎ、対話できる環境

フィンランドで訪問した学校の職員室はゆったりとくつろげる空間になっていたし、オランダのイエナプラン校では、昼食時に幼児クラスには保護者が交代で入り、高学年は自転車で自宅に帰り昼食をとる子たちがいて、教師は昼食指導なしで、仲間同士、くつろいで対話する時間を持っていた。

事務的な空間の日本の職員室を、対話的空間へ変化させれば、教師自身の意識変革をもたらすか

もしれない。

③多様性の尊重から民主的市民の育成へ

マイノリティの子にとっての学習環境という意味では、それぞれの母語を重んじてカリキュラム編成するフィンランド、オランダ語を獲得するために保護者も巻き込み、家庭でも使用できる学習教材作りを行っているオランダと、異なるアプローチがみえた。しかし、日本のように自分たちのやり方を押し付けずに受け入れようとしている。教室や廊下に自然光や明るい色調を多く取り入れているのも、冬が長いというだけでなく、難民生活など苦しい経験をした子どもたちをゆっくり癒しているように思えた。

イスラム系の子どもの中には、家庭生活での当たり前と、学校での自由・平等との隔たりに気づき、悩む子もいるそうである。しかし、このような経験が、多様な視点から見つめる市民を育てることにつながるようにも考える。異なる価値観を認めながら、自己肯定感をもって他者との対話を進めていくことは、ケアという視点からも重要であろう。

4-2 フレネ教育とイエナプラン教育への期待

今回訪問した学校の教師たちは、皆「21世紀スキルはまさに私たちの教育とマッチする」と述べていた。実践的教育者であるフレネと研究者で理論家のペーターゼン。フレネは人間と仕事（労働、自然生活、遊び、学び）を大切に、ペーターゼンはより、人と人との関わりを重視したのではとFreekは語った。子どもたちは、自分の行動の意味を理解し、見通しをたて、他者と関わって学びを深めており、必要に応じたICTの活用も幼児から積極的に行っていた。これはフレネが、積極的に映像やテクノロジーを取り入れることを推奨していた。

イエナプラン校の、「ワールドオリエンテーション」は、教師がテーマを決定し年間の計画を立てているとのことで、これはどちらかというところの「興味を中心」に近い気がした。フレ

ネの「興味の複合」という考え方との違いも含め、MJ スクールを次回はぜひとも参観したいと考える。

4-3 今後に向けての課題

フィンランドで小中学校向けに開発したいじめ防止のための学習プログラム「KiVa（キヴァ）」やオランダの「ピースフルプログラム」は、どちらも望ましい市民を育成するためのプログラムであり、一部は日本でも紹介されて実践が始まっている。

プログラムを市民性育成のために、どのように活用されているのかを、今後調査したい。

また、Tarja も話していたが、21 世紀型スキルが求められ、ICT やプログラミング、キャリア教育がどの子にも同じ形で求められると、これまでのような自由裁量が狭められるのではないかという懸念がある。

実は、オランダもフィンランドもテストの結果でのランク付けははっきりとしており、将来の道もランク付けにかなり影響される。オランダでは初等教育終了テストの平均スコアやその後の進学先など全ての小学校の評価が一般公開されていて、それが学校選びに対する重要な要素にもなっている。北欧の教育改革は経済政策とも密接に絡んできた。今回の改革が、それぞれの学校や教師・子どもの活動を逆に狭めることにならないように、何を心がけるべきかをていねいに調査していくこと。それは日本の教育改革にも大きな示唆を与えるのではないだろうか。

また、個別学習と協同的な学習を大切にしたフレネやペーターゼンの市民育成の理念は、ローリス・マラグッチを中心に発展したレッジョ・エミリアの教育とも共通する。今後は、この3つの教育の関連も意識して追究していこうと考える。

5 おわりに

今回の研修のコーディネート、通訳をしてくださった Tarja 氏とリヒテルズ直子氏、フィンランド語の素晴らしい通訳をくださった下村有子氏に心より感謝する。また、視察を一緒に行い、多様な角度から教育を見つめた先生方の視点は、大変参考になり、今後の研究への方向を導いてくださった。深く感謝する。

今回は、研修のまとめと気づきに留まったので、今後は、もう少し掘り下げて研究を深めたい。

《注》

- (1) フィンランドで長く小学校教師を務め、2017年6月に退職。その間日本の小学校やフレネ教育研究会、フィンランドのフレネ学校に関わってきた。日本語も堪能で、北川達夫ほか編「フィンランドの教育」にも執筆している。

参考文献

- 秋田喜代美・小玉重夫他（2016）『教育の再定義』 岩波書店
- 北側達夫他（2016）『フィンランドの教育』 フォーラム A
- 猶原和子（2009）『子どもの幸福度世界一のオランダに学ぶ～イエナプラン校参観記～』「児童教育19」お茶の水児童教育研究会
- 日本PBL研究所（2016）『欧州教育視察2016』PBLブックレット17号、日本PBL研究所
- リヒテルズ直子（2006）『オランダの個別教育はなぜ成功したのか』 平凡社
- リヒテルズ直子・苫野一徳（2016）『公教育をイチから考えよう』 日本評論社
<https://freinetbeweging.ng> 2019.1.20 最終閲覧
- <http://www.freinetschool.be> 2019.1.20 最終閲覧